

目的 寝衣は—たび病気をした時には直ちに病衣になるものである。体の自由のきく患者においては、健康時着用の寝衣で支障ないが、体の自由を失った患者や、着脱の意志を失った患者—つまり看護人を必要とする患者にと。まは、患者側からも看護人側からも、合理的機能的病衣が要求されるわけである。しかし看護の忙しさに追われて、病衣の研究がなされていなのが実情である。看護人を必要とする体の自由を失った長期療養者を対象に病衣の研究を行なったので、その結果を報告する。

方法 アンケートにより患者並びに看護経験者の意見を求めた。さらに養老院、病院にて体の自由を失い看護人の必要な患者の病衣について意見を求めた。それらに基づいて二部式病衣について研究を行ない、病衣の取替、加療、患者の動作等による各種の条件を考慮した寸法、デザイン、打ち合せ方をランダムに組み合わせ、和服型上衣12枚、洋服型上衣12枚、下衣16枚を作製した。これを中肉中背の5名の被験者に着用させ、着用中の着心地、動作による便利さ、看護人からみた着脱の難易度等から各条件について◎○△×の採点法により採点を行なった。

結果 常識的に考えられる病衣とはかなり異なった意見が着用実験の結果から見られた。寸法的には着脱は大きければ良い様に考えられがちであるが、身丈、身幅、袖口等寸法的に適当な数値と思われるものが得られた。デザイン的には従来の着物型より洋服型に人気があるように思われた。